

新幹線で家庭円満計画～いってらっしゃいからおかえりなさいまで～

【問題・課題】

■九州新幹線開通が熊本に与える効果

本提案の対象地である熊本市の城下町は、熊本城を中心として熊本の観光の拠点となっている。熊本城下町には、築城 400 年を迎えた熊本城やその周りを流れる坪井川、古い街並みを形成する新町・古町など、観光や地域の資源となるものが存在している。現在城下町では、観光による地域活性化を視野に入れた行政の政策や、市民が主体となったまちづくりが展開されている。また、熊本市全体としても、2012(平成 24)年 4 月の政令指定都市への移行や、2011(平成 23)年 3 月 12 日の九州新幹線全線開通などの都市圏の拡大を目指している。このように、都市の規模や交通機関の発達により、観光客をはじめとした多くの人々が熊本に出入りする機会が増えると考えられる。

■観光客ではなくビジネスマンをターゲットに

九州新幹線の開通に伴い、熊本、福岡、鹿児島などの南北の都市間の移動時間が短縮される。特に、福岡ー熊本間の移動時間は、従来の約 1 時間 30 分から約 35 分にまで短縮される。この移動時間の短縮により、商業やビジネス、観光を目的とした熊本への出入りの増加が期待される。特に通勤圏の拡大は、ビジネスマンの通勤スタイルに大きな変化を与えることが予想される。

熊本市では、市の中心市街地を都心と位置付け、熊本駅周辺を副都心としての位置付けを目指して整備が進められている。具体的には、合同庁舎の移転やビジネス街の建設が計画されている。ビジネスマンにとって熊本駅周辺は仕事場となり、一日の生活の大半を占める場となる。このような物理的な都市の構造の変化に伴い、中心市街地と駅周辺、熊本県外と熊本市内などのビジネスマンの往来が増加することも予想される。

以上のような将来像を抱えた熊本城下町では、観光客だけでなく、ビジネスマンを視野に入れたまちづくりが必要である。

■熊本の城下町

1.城下町の概要

新町・古町地区は、熊本城の城下町として発展し、現在も町並みや文化にその個性が見られる(図-1 参照)。

古町は、熊本駅方面から城下町への入口にあたり、正方形の街区とその中心に寺院を配した町割りが特徴的である。坪井川に面した唐人町筋は江戸時代には坪井川からの荷揚げ場であったともいわれ、また大正時代には「花の唐人町」と言われた。このように唐人町筋をはじめ、古町の各署において現在も城下町の雰囲気を残している。また古町の南部は、

新町は坪井川を境として古町の対岸に形成された。熊本城のひざ元として、町人や武士が暮らしていた。当時の水運と密接に関わりながら御門や街区が形成されており、その町並みや町屋の配置には城下町の歴史を感じる事が出来る。

現在の熊本市の政策をみると、「駅都心間の協働まちづくり」のように、市民と行政の協働により様々なまちづくり活動がみられる。一新まちづくりの会や五福ふれあいまちづくりの会を中心に、観光客や地域住民を対象として地域資産を活かした活動がなされており、今後これらの活動が発展していくことが城下町のまちづくりにおいて重要である。

一方で桜町は、近代化の過程で様々な変化を遂げてきた街である。交通センターやデパートなど都心の機能が集まる一方、坪井川と石垣に面した町として、それらを活かしたまちづくりの在り方が求められている。

## 2. 城下町の抱える課題

このようにまちづくり活動が行われる中で、様々な課題も見えてきている。例えば城下町の地域資源は、歴史的建造物をはじめ、藤崎台のクスノキなどの自然、坪井川、街区など多岐にわたる。これらを活かすには個別の議論だけではビジョンを描くことが難しく、これらを総合的に活かすための政策が求められている。また、近年のマンションの増加により、昔から住んでいる住民だけではまちづくりの発展が難しくなっている中で、新規住民を巻き込んだ地域づくりの方向性が模索されている。

## 3. 将来の熊本城下町におけるビジネスマンが抱える課題

熊本で働くビジネスマンの快適な生活を実現するためには、熊本城下町における以下のような問題点を解決する必要がある。

- ・新幹線ができて、熊本駅から中心市街地への移動に時間がかかる
- ・中心市街地の方が何でもそろっていて、副都心としての魅力が足りない
- ・営業で熊本を訪れた際に、どこで時間をつぶしたらいいのか分からない
- ・昼の休憩中にゆっくり過ごせる場所が駅周辺にない
- ・休日に城下町で家族と楽しく過ごせる場所がない（家族連れは郊外のショッピングモールを利用することが多い）

このように、九州新幹線が開通して移動が便利になっても、熊本駅周辺から中心市街地を一体的に考えた城下町のまちづくりを行わなければ、ビジネスマンにとって魅力的な熊本城下町にはならないと考える。ビジネスマンの生活を向上させるためには、通勤圏の拡大に伴う快適な通勤スタイル、新たなビジネスライフの提案が必要である。

このような課題を解決するために、熊本城下町でビジネスマンの生活の向上を図るために城下町におけるビジネスライフ向上のための提案を行う。

## 【提案の目的】

本提案の目的は、熊本城下町がビジネスマンの「行ってらっしゃい」から「おかえりなさい」までの豊かなビジネスライフを演出することである。ここで、ビジネスライフの向上とは、お父さんが健全なビジネスライフを過ごし、そのビジネスライフが家庭円満につながるといった考え方である。すなわち、朝の「行ってらっしゃい」から始まる一日の中で、お父さんが活力を保ちつつ気持ちよく働いて、家族のあたたかい「おかえりなさい」で一日の終わるという考え方である。さらに、ビジネスライフの向上が家庭円満につながるように、城下町における家族の過ごし方に広がりを持たせようという狙いもある。それが、城下町での家族の過ごし方に、楽しみを増やすことにもつながると考えるからである。

## 【提言内容】

○城下町全体に対する提案

### ■レンタサイクルの活用

九州新幹線で熊本駅にたどり着き、駅から中心市街地へ通勤する場合、現在の交通機関では時間やお金を費やす。ビジネスマンは、時間に追われているため、通勤はスムーズに行いたいと考えているだろう。自転車を利用するとなれば、古町・新町を通り中心市街地へ通勤、または、白川沿いを走って中心市街地まで通勤することが考えられる。

観光客の場合は、観光という目的からゆっくり街を見て回るため公共交通機関を利用したり、歩いたりと時間に余裕がある。また、時間に追われていない人や公共交通機関の利用を好む人は公共交通機関を利用すると考えられる。

そこで、駅から中心市街地までのビジネスマンの通勤をレンタサイクルを利用してできるような仕組みを提案する。自転車を使うことの利点は、

- ① 通勤という時間に少しでも体を動かすことで健康につながる
- ② 白川や坪井川周辺の景色を見ながら気持ちよく通勤する事で心の健康につながる
- ③ ビジネスマン以外の利用者も多い

である。以上のような特徴を踏まえるとレンタサイクルの乗降所が重要になることが考えられる。そこで、ビジネスマンの通勤ルートや中心市街地のビジネス街の位置などを考慮して乗降所を以下のように設定した。

1.熊本駅、2.モール、3.船馬橋、4.辛島公園、5.新代継橋周辺の河川敷、6.白川公園、7.花畑別館裏の駐輪場(立体駐輪場にする)

1の熊本駅は、九州新幹線を使って熊本へ通勤する人や熊本へ訪れる人の乗降所となる。

2のモールは、朝、モールにあるカフェや飲食店を利用するビジネスマンを考慮している。後述する健康ポイントカードとの併用を行う事も出来るといった利点もある。

また、モールの買い物客にとっては、交通量の多い3号線沿いを車で買い物に来るには不便なため、その買い物客のレンタサイクルの活用にもモールの駐輪場は対応できる。

3の船馬橋は、まず、現在の桜町にある坪井川遊歩道を熊本駅まで延ばす。そうすること

で、新しくなった坪井川遊歩道がサイクリングロードとしても利用できるようになる。その中間地点である船馬橋に乗降場を設けることで、ここで自転車を降りて桜町のビジネス街等に歩いて通勤することができる。さらに、通勤以外のレンタサイクル利用者には、船馬橋で自転車を降りて新町・古町等の城下町の散策をすることが期待できる。

4の辛島公園は、新市街周辺で働くビジネスマンの通勤を考慮したものである。

5の新代継橋は、白川沿いを自転車で通りながら中心市街地へ通勤したい人を考慮したものである。また、通勤以外の利用者には、河川敷で休憩する、昼食をとるなどの利用もできるようになる。

6の白川公園は、水道町近くで働くビジネスマンの利用を考慮したものである。

7の花畑別館裏の駐輪場は、坪井川遊歩道を通して熊本市役所周辺のビジネス街に通勤するビジネスマンを考慮したものである。

このような仕組みをつくることで、時間に追われるビジネスマンの通勤が快適になることが考えられる。さらに後述する健康ポイントカードの仕組みと連携することで、メタボに悩むお父さんの健康増進を助けることが期待される。また、ビジネスマン以外の人も利用できるため、市民、観光客などがレンタサイクルを利用し、城下町散策の幅が広がることが期待できる。

#### ■Mushanyoca(むしゃんよか：熊本弁でかっこいい)Card システムの開発

**Multi Sharing and Near Youthful Card**：「家族でポイントを共有できる、多方面に使えるカード」

自転車を利用したいビジネスマンもいるが、時間に余裕を持って通勤するビジネスマンや、健康を考えて歩いて通勤するビジネスマンも少なからずいる。

そこで、熊本駅から降りて、自転車で通勤する人、歩いて通勤する人にも福岡で使われているニモカやスイカのようなカードの利用を図る。この「むしゃんよか」は、レンタサイクルを利用して通勤する人、歩いて通勤する人が使うと「むしゃんよか」ポイントとしてたまるシステムになっている。例えば、「今日はモールのカフェで朝食をとりたいからモールまで歩いて、そこから市電を利用しよう」というようなビジネスマンがいるとする。そこで、モールにある機器(ガーマダス：「がまだす」は熊本弁で「働く」という意味)にカードをかざすことで「むしゃんよか」ポイントがたまる。さらに、モール内で軽食を取る際にも「むしゃんよか」ポイントが付く。このカードは、後述するモールで利用できるようなシステムになっている。将来的には、他の店舗でも利用できるようにする。一般のモールの利用客も「むしゃんよか」を利用できるため、家族全員でカードに登録すると、家族みんなでポイントを共有できるといった便利な機能がある。

また、「むしゃんよか」は、以下のようなレンタサイクルとの併用機能がある。

- ・レンタサイクルにカードをセットできるように「ガーマダス」を設置する
- ・乗降場やでカードを通しポイントがたまる→1日往復 50 円、1週間(5日計算)250 円、1

カ月 1000 円（歩きで付くポイントも同じに設定する）

このように多機能な(Multi)ポイントカードのシステムをつくることで、ビジネスマンであるお父さんの若々しさに近づく(Near Youthful)ための努力が家族の共有する(Sharing)ポイントを増し、家族の楽しみを増やす。最終的には家庭円満へとつながることが期待される。また、モールの利用客のレンタサイクルの利用、ポイントカードの普及も期待される。

#### ○祇園橋周辺における提案

熊本城下町全体でのビジネスマンの移動を考えた提案は上記のような内容になる。城下町では、中心市街地活性化計画や、新町・古町のまちづくりなど、すでに軌道に乗ったまちづくりや計画があり、本提言との連携を図ることができると考えられる。

平成 23 年 3 月の新幹線全線開通とともに、熊本市は次の平成 30 年頃の在来線高架化完了に向けた新たなまちづくりを行うこととなる。その際に、今回の「熊本駅周辺地域整備基本計画」の対象範囲と、城下町である新町・古町の境界である祇園橋周辺が重要な場所となる。祇園橋周辺は、現在でも駅・坪井川・万日山・古町といった様々な場所を見渡すことができる視点場である。つまり、それらをつなぐ場所でもある。しかし、橋であるという認識が低く、多くの交通の流れも県道 28 号線から国道 3 号線方面へと流れている。また、新町・古町地区はこのまま放っておくと高いビルなどが建つ恐れがある。

そこで、今回は熊本駅を利用するビジネスマンの視点に立って、駅から城下町の中心市街地へ向かう入り口となる場所に着目し、熊本駅方面から新町・古町への玄関口となる祇園橋周辺の提案を行う。(図-2 参照)

#### ■まちなかショッピングモール

熊本市においても全国の都市と同様に、郊外への大型ショッピングモールの出店が相次いでいる。これらの大型ショッピングモールはモール内で日用雑貨から食料品、衣料等の買物から娯楽、休憩、食事まで全てを行う事ができることから、子供を持つ多くの家族に利用されている。この問題は熊本市だけではなく、全国的に子供連れの家族が市街地において、快適に過ごすことのできる場所は少ない。よって一例として、祇園橋近くの古桶屋町をモールとして整備することを提案する(図-3、図-4 参照)。

ショッピングモールの特徴として以下の 3 点が挙げられる。今回の提案ではこれらの特徴を最低限満たす必要がある。

- ① さまざまな物・サービスが一か所で提供される。
- ② 休憩スペースがある。
- ③ 買物に関係なく利用できるトイレがある。

まず①に関して、今は倉庫や空き家となっている町屋を活用する。町屋を安く貸し出す時には、一つの業種に偏らないよう調整することが重要である。また、町屋のリノベーションと建築などの学生の実習をリンクさせる。これにより、利用者は初期投資が安く済み、

学生は実践的な実習を行う場ができ古い町並みを守っていこうという若い力も育成出来る。

つぎに②と③である。街中でこのような場所が欠如していることが、家族連れが少ない大きな原因である。そこで注目する場所が古町において各区画に1件ずつあるお寺である。古桶屋町においては区画の中心にお寺があり、それを囲むような形で町屋が存在している。お寺を休憩スペース等に活用することで、そのまちの歴史に触れることもできる。また、書店やカフェなどを、モール内でも比較的大通りに面し、熊本駅に近い場所に立地するなど、ビジネスマンが空いた時間を有効に活用できる工夫を行う。

つまり、まちなかショッピングモールは既存のショッピングモールに加え、以下のような特徴も兼ね備える。

① まちの歴史に触れることができる

② まちなかのイベントとのリンク

②については二種類ある。まずは定期的にあるお祭り等である。特に北岡神社では一年を通してさまざまなイベントが行われており、これらのイベントとリンクできることがこのモールの最大の特徴である。二つ目は、市民がまちづくり活動を行う際の拠点としても容易に利用することができることである。

今回は古桶屋町を古町への玄関口として提案したが、このようなまちづくりは1、2年でできるものではなく10年以上かかるものである。よって、この場所から少しずつ新町方面へと区画単位で広がっていくことを期待したい。

#### ■愛妻弁当をさらにおいしく

家庭円満＝愛妻弁当である。しかし、せっかくの愛妻弁当をオフィスのデスクで食べているのでは味気ないので、愛妻弁当を美味しく食べられ、短い昼休みを快適に過ごすことができる空間の提案を行う。

現在の「熊本駅周辺地域整備基本計画」においても祇園橋周辺の坪井川、白川沿いの緑化は計画されており、坪井川沿いに関しては一部完成している。

この空間にさらに魅力を持たせるために簡単なテイクアウトのお店などの出店を行い、道路を渡ればすぐのまちなかショッピングモールとの連携を図る。

#### ■お寺の多目的利用

古町に古くから立地する多くの寺院を、誰もが気軽に立ち寄れる場として、新しい利用方法を提案する。

##### 1. ビジネスホテルとしての利用

九州新幹線が開通すると、営業や出張のために新幹線を利用して熊本を訪れるビジネスマンも増加する。熊本駅にも比較的近く、中心市街地へも足が伸ばせる場所にある古町は、ビジネスマンの宿泊場所として適しているといえる。

仕事でホテルに泊まる機会の多い人にとっては、一般的なビジネスホテルはいつでも泊

まる機会がある。しかし、熊本を訪れたときには、古町のお寺へ宿泊をすることで熊本の古町の歴史を感じることができるメリットがある。

お寺独自の体験メニューや宿泊形態を用意するなど、宿泊客は目的に合わせたお寺を選ぶことができると共に、様々なお寺に泊まる楽しさを提供する。また、お寺の周りにはショッピングモールもあるので、出張先に家族を連れていくことも可能である。新幹線を利用した宿泊者には、ショッピングモール内店舗の割引や特典の用意や、古町だけでなく、新町や桜町との連携を図ることで、城下町への経済的効果、回遊性の向上を促進させる。

## 2.サテライトオフィスとしての利用

熊本には、河原町の若手クリエイターや各大学などで芸術や建築を学ぶ学生などが多くいる。彼らの創作活動の場所は各場所にあるものの、一同に会し交流する場、共に作業する場、作品を公に展示する場は少ないといえる。そこで、熊本で活動する若手クリエイターや、学生のための活動場所としてお寺を提供する。

オフィスは誰でも気軽に見学できるものとし、作業場所だけでなく、常に情報発信も行っていく。また、そこで生まれた作品は、坪井川や白川沿いなどのまちのオープンスペースに展示し、誰でも自由に見学できるものとする。

お寺では、宿泊客のビジネスマンとオフィスで活動を行う若者、作品の展示場所では、様々な人とそこで作品を説明する若者との新たな交流が生まれる。若者にとっては、彼らの才能を育てると共に、若者とビジネスマンの協働など、新しいビジネスチャンスを創造する。またビジネスマンにとっては、若者の活動やそこで生まれる作品から、仕事のヒントを生み、より質の高い仕事につながる。様々な分野の人と関わりを持つことで、最終的に、熊本の将来のビジネスを活性化させていくことが期待される。

### ■野外映画館

九州新幹線が開通し、熊本駅周辺にオフィスが出来始めると、その周りに居酒屋などの飲食店が増えることも予想される。また、中心市街地周辺にも飲み屋街が形成されており、お酒を楽しむ場の提供はすでになされている。反対に、家族連れが夕方から夜にかけて楽しめる場所はまちなかには少ないといえる。

そこで、祇園橋周辺では、夜も家族で楽しむことのできる野外映画館開園の提案を行う。野外映画館とは、坪井川沿いに立ち並ぶ建物の壁面を利用して、巨大スクリーンを設置し、映画鑑賞やスポーツ観戦を楽しむ場のことである。客席は、スクリーンを設置する対岸の遊歩道とし、祇園橋の上からも自由に楽しむことができる。日が暮れてからの上映は、仕事帰りのビジネスマンやショッピングモールの買い物客の集客も高い。また、野外であるため、小さい子供を連れた家族も気軽に楽しむことができる。以上より、祇園橋周辺は夜もビジネスマンや家族が訪れやすい場所となる。



図－1 現状の城下町の平面図



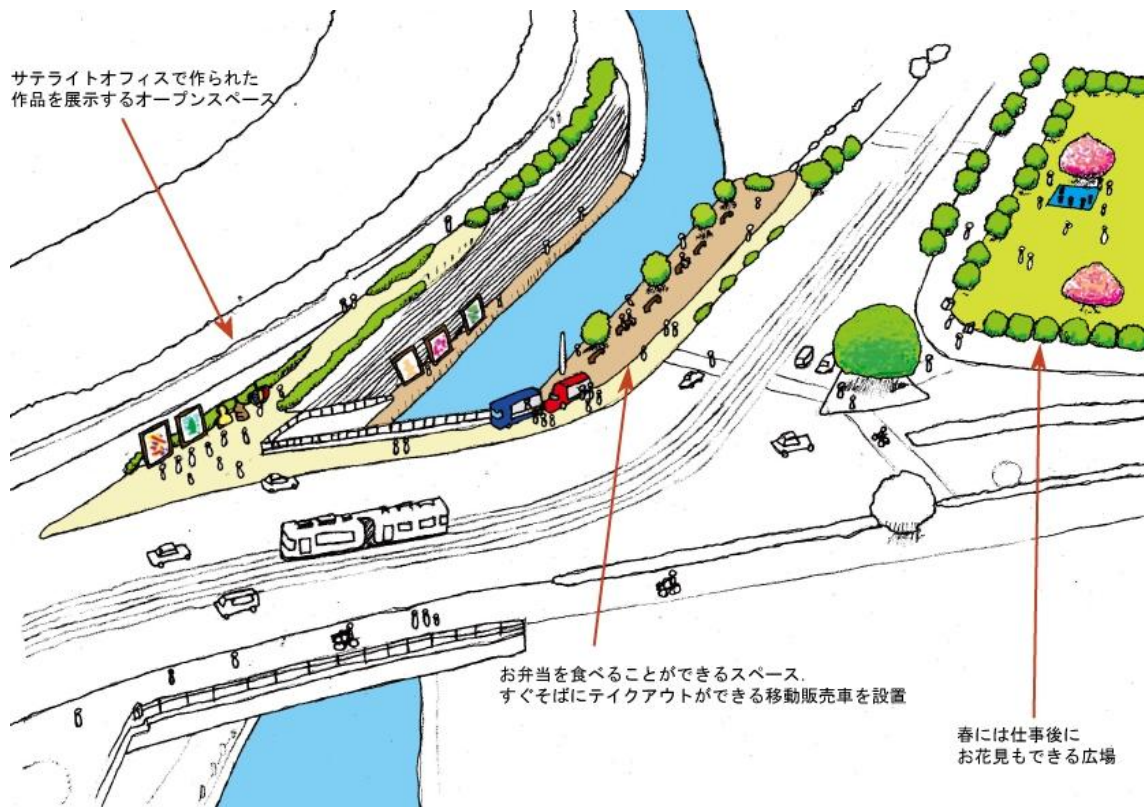


図-2 祇園橋周辺の水辺のイメージ



図-3 ショッピングモール周辺のイメージ



図-4 ショッピングモール内の平面図